

創立 1986 年

2021～2022年度クラブ目標

『新たな奉仕に踏み出そう
ロータリーの次の百年のために』

会長 鈴木 孝 幸
幹事 須藤 正 樹



奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

2021～22年度国際ロータリーテーマ

第1681回例会

令和3年9月16日 (12:30～13:30)



○ソング

- 我等の生業

○ビジター

- 佐川庄司様

○スマイルBOX

- 鈴木孝幸会長（本日は佐川様、卓話ありがとうございました。なかなか触れる機会の無い世界ですが、くわしく解説して頂いたのしくお聞きすることが出来ました。個人的にも勉強したくなりました。）
- 池田浩章会員（いつもお世話になっております。佐川庄司様貴重な卓話誠にありがとうございました。）
- 永野文雄会員（ゲストの佐川庄司様、卓話ありがとうございました。）
- 関谷亮一会員（藤田教育振興会藤田記念博物館学芸員 佐川庄司様卓話ありがとうございました。）
- 金田昇会員（佐川様、本日は卓話ありがとうございました。職業奉仕で中座いたします。）
- 藤田和克会員（佐川庄司様、本日はありがとうございました。大変勉強になりました。）

▶第1681回例会出席状況 (R3年9月16日)

① 出席免除を受けていない正会員数	51名
② 出席免除の適用正会員数	14名
③ 全正会員数	65名
④ ①の出席者数	32名
⑤ ①のメイクアップ者数	0名
⑥ ②の出席者数	10名
⑦ = ④ + ⑤ + ⑥ (メイクアップ補填後の出席会員数)	42名
⑧ = ③ - (② - ⑥)	60
⑨ = ⑦ / ⑧ × 100 (例会出席率)	70%



▶例会日: 第1・第3木曜日 (12:30) その他の木曜日 (18:30～19:30)

▶例会場: 白河市新白河駅前 東京第一ホテル新白河

▶事務局: 〒961-0957 福島県白河市道場小路96-5 (白河商工会議所内) ☎23-3101 FAX22-1300

本日のプログラム

■会長の時間

鈴木孝幸会長



皆さん、こんにちは。本日も皆さんお忙しい中、このハイブリット例会にご参加いただきまして誠にありがとうございます。今回、ご覧のようにいつもの須藤幹事がちょっと欠席ということで、代打で車田次年度幹事が努めていただきます。須藤幹事、目の手術をいたしまして、今手術は無事に終わったんですけど経過措置ということで自宅で療養している形であります。決してコロナで休んでいるわけではないということを、公明正大に申しまして須藤君の回復を待ちたいと思います。それでは、本日のお客様のご紹介をいたします。また改めて藤田龍文会員のほうからご紹介ありますが、私のほうからも正式名称でいいますと、公益財団法人藤田教育振興会藤田記念博物館の学芸員の佐川庄司様でございます。私も個人的な話ですけども、佐川様には以前、白河市のまちづくりの仕事で一緒にいたしまして、早稲田大学の有賀先生の所に一緒に行かせていただいたという経緯がありました。本当に歴史に対する知識も豊富、頭脳明晰です。知識もすごい豊富な方で今日のお話も随分中身の濃いものになるかと期待しております。今回の例会は、例年であればホームミーティングの発表例会だったんですけども、コロナ禍で飲食を伴う集まりというのは自粛ということで、ホームミーティングは延期というようなご連絡をさせていただきました。それで急遽、昨年からお話がありました歴史文化研究愛好会担当例会やりたいということで、関谷委員長のほうから佐川さん推薦で今回は急遽佐川様の卓話ということになりました。佐川様には本当にお忙しい中、お時間をいただきまして感謝申し上げます。今日は、「谷文晁と白河」という題目で卓話をいただくんですけども、ネットで事前に拝見させていただきましたが、藤田龍文会員も先程言いました藤田記念博物館で、今月の18日の4時から佐川様が開催する講座と内容が今回同じものになっているようでございます。多分、時間が今日短いのでダイジェスト版でやっていただけたと思います。本来は今日のダイジェスト版を聞いて興味を持たれた方は、是非18日に会場に足を運んでいただけて見ていただきたいと話をしようとしたんですけど、先程佐川様に確認しましたら、好評で申し込み締め切ってしまったということで、今日の卓話をしっかり皆さん聞いて興味を持たれるとよろしいかと思います。それで実物の谷文晁の絵は藤田会員の所で展示しておりますので、このお話を聞いた後に足を多く運んでいただけたらいいと思います。よろしくお願いします。谷文晁といえば、白河では白河だるまですよね。「白河市長の手控え帳」ってよくいただくんですけども、そちらの中に谷文晁は何者という題目で記載されていたものがあります。その内容を

ちょっと紹介しますと、白河といえだるま。眉や髭に松竹梅、鶴亀が書かれ優しく上品な顔立ちはいつ見てもほっとする。白河の繁栄を願う定信の命で、文晁がだるまの顔を書き手本に与えたことに由来するとされている。日本一縁起のいいだるまの恩人、文晁先生に感謝ですねと市長が言っております。白河だるまといえ今年夏に、私、明戸に住んでいるんですけども、横町、会社の近くに「だるまランド」というものがオープンいたしました。私は設計に直接絡んでいないんですけども、私の所属する白河建築サポートセンターのほうで絡みがあります。ですので、うちの事務所からすぐに歩いても行ける距離なので、先日うちの職員とちょっと施設を覗いてまいりました。古い蔵を多分曳家したんでしょうかね。それで改修をしたり、あと昔の倉庫を改修利用したり、それに今度新築の部分をつけたりするんですけども、非常になかなか面白い建築であります。施設全体そんなに面積が大きいものではないんですけども、様々なコーナーが設定されていて、彩り豊かというイメージでなかなか面白いですね。例えば、合格祈念のだるま神社、だるまの絵付けの体験所。あと、お土産のだるまとか食品なんかもある物品販売のコーナーもありまして、本当に変化にとんだ内容で子供からお年寄りまで皆さんで楽しめる内容になっております。多分、きっとコロナが終息しましたらば、小峰城、そしてその後だるまランド。その後に、先程の龍文君の歴史の藤田記念博物館回って、今度南湖神社に抜けるとかいう観光ルートが出来上がるようなところで、非常に一つ一つが観光の目玉になるのかななんて期待しております。早くコロナが明けることを祈っております。それでは、今日は卓話の時間をいくらかでも話していただけたらということで、私の話はこの辺にしたいと思います。最後に佐川様、卓話を楽しみにしております。よろしくお願いします。

■幹事報告

車田裕介副幹事



- コザロータリークラブ 会長 島袋哲安、創立60周年実行委員会委員長 前原雅司：コザロータリークラブ創立60周年記念式典・祝賀会・各クラブ対抗ゴルフコンペのご案内
- 後田則嗣：総裁選の公示・投票票について（依頼）
- 2530地区 ガバナー 志賀利彦、地区幹事 蛭田修二、地区大会実行委員長 里見潤：2021-22年度「地区大会」開催について
- 学友・平和フェロシップ委員会委員長 吉田佳代、地区学友会代表幹事 鈴木美恵子：「福島から贈る感謝とエールのコンサート」御礼
- 公財）ロータリー米山記念奨学会 事務局長 柚木裕子：ハイライトよねやま258号
- 第2530地区公共ITイメージ・IT委員会委員長 相良元章、公共イメージ委員会委員長 内藤哲太郎：ポリオ根絶募金箱の配布について

○深谷ノースロータリークラブ実行委員会：深谷ノース
ロータリークラブ創立20周年記念誌

■本日のプログラム

歴史文化研究愛好会担当例会

○歴史文化研究愛好会

関谷亮一会長



皆さん、こんにちは。今日は、歴史文化研究愛好会ということで時間を取っていただきましてありがとうございます。プログラム委員会の皆さんにお礼申し上げます。本日、先程会長からご紹介ありましたが、公益財団法人藤田教育振興会 藤田記念博物館の学芸員の佐川庄司さんをお迎えして、先程ご紹介ありましたように白河と文晁ということでお話をいただきたいと思います。9月9日から10月3日まで、藤田記念館のほうでの特別企画展が開かれておりますが、わたくしも企画展の一番始まりの日に見させていただきましたが、素晴らしい谷文晁、あるいはそのお弟子さんの作品が並んでおりました。是非、時間がありましたら皆さんご覧になっていただきたいなとそんなふうに思います。それでは、早速ですが佐川庄司さんの講話をいただきたいと思います。その前に藤田龍文会員に講師の先生の紹介をしていただきます。よろしくお願いいたします。

○藤田龍文会員



皆さん、こんにちは。只今、ご紹介いただきました藤田です。ロータリーの職業分類は倉庫業となっておりますが、こういった仕事も少しやっております。講師の紹介ということですが、私が紹介するまでもなく佐川学芸員は長く白河市のほうで学芸員をやってらっしゃいまして、この地域の歴史や文化の第一人者となっております。私も昔、少しだけ市役所に勤めさせていただいて、人生初の仕事の初の上司が佐川先生。その時に、いつの日か何らかの形で恩返しできればなということをずっと思っておりまして、佐川さんが役所を退職されまして、その後、中山義秀記念館の館長をなされまして、そちらも終わるということでしたので、うちの財団のほうにお迎えさせていただきました。うちの収蔵品は昔からあることはあるんですが、なかなか日の目を見たり、皆さんに解説を上手くお知らせすることはできなかったのですが、佐川さんのおかげでこういった形で皆さんにお披露目が出るということになっております。もちろん収蔵品も歴史あるものだとは思っておりますが、何よりも佐川さんという方が



この地域におられて、こういうふうに皆さんにいろんなことをお知らせできるというのが、何よりの宝だと思っておりますので、短い時間ではありますがお話を聞いていただければと思います。あとは、作品は10月3日まで博物館のほうでやっておりますし、年に2回くらいはテーマを変えてどんどん開催していきますので、そちらのほうもお時間あればご覧いただければと思います。それでは、佐川さんよろしく願いいたします。

○公益財団法人藤田教育振興会 藤田記念博物館

学芸員 佐川庄司様



あらためまして、佐川と申します、よろしくお願いいたします。先程藤田龍文さんから紹介がありましたが、白河市の小峰城歴史館、中田の歴史民俗資料館で長いこと学芸員を務めておりました。藤田龍文さんには大学出たての若いころ、「白河結城家文書」や最後の白河藩主阿部家に伝来した美術品などの整理を手伝って頂いたことがありました。私が市役所を退職した後、藤田記念博物館のオーナーである藤田さんに依頼を受け、昔の恩返しということもあって、昨年4月から藤田記念博物館学芸員として美術品の調査研究のお手伝いをさせて頂いております。皆様の手元に博物館のパンフレットを配布しておりますが、そこに掲載されておりますとおり、藤田記念博物館には白河の歴史と文化を伝えるような膨大な数の美術品の一部が紹介されております。私も市の美術品の収蔵展示を担当しておりましたが、それに匹敵する、あるいは市所蔵美術品を上回るのではないかとこのほどのコレクションが収蔵されております。そういう意味において、藤田家において博物館をつくられたということは、白河の歴史と文化に寄与するところは大きく、非常に意義のあることだと思っています。藤田家は代々芸術家のパトロン、資金援助なども行っておりました。関東大震災の直前の大正時代には結城素明という日本画家が文部省留学生としてフランス留学の際に藤田家がその旅費や滞在費用を援助しています。

さて、本日は30分というお時間でお話をさせて頂きますが、用意したパワーポイントが一時間仕様なので、そのダイジェスト版としてパソコンを使いながらお話させていただきます。「谷文晁と白河、そして松平定信」というテーマです。谷文晁は江戸絵画の巨匠です。江戸時代の狩野探幽、池大雅であるとか与謝蕪村など江戸絵画の巨匠と呼ばれる画家がおりますが、文晁もまたその巨匠の一人なのです。文晁は江戸、東京の上野駅と御徒町の間あたりの場所に住まいと画塾がありました。画塾は「写山楼」と名付けられ、そこから富士山がみえたそうです。それで山を写す楼閣という意味で画塾は写山楼と呼ばれておりました。その文晁が天保11年西暦1841年に亡くなってから今年でちょうど180年になります。180年という皆様なんか半端な数字じゃないかと思うかもし

れませんが、日本と中国の暦というのは60年で一回りする
 という考えがあります。十干十二支、戊辰戦争の戊は
 十干のひとつ、辰は十二支のひとつであり十干十二支の
 組み合わせは60通りができ、60年が一回りという形にな
 ります。これが還暦ですが、文晁が没してから三周り・
 180年ということです。先程鈴木会長が「市長の手控え
 帳」で谷文晁「この絵師、何者」というテーマで書いて
 いるというお話がありました。丁度8年前、文晁生誕250
 年記念の企画展「谷文晁展」が東京のサントリー美術館
 で開催されました。その展覧会で「この絵師、何者？ 人
 気者」というタイトルも付けられていて、市長さんがそ
 れをテーマに手控え帳に感想を述べているのです。その
 際には白河馬町大統寺所蔵の極彩色の文晁の涅槃図や歴
 史民俗資料館所蔵の三郭四園図を描いた文晁作品などが
 出品されています。「この絵師、何者」という意味に
 は、江戸時代の狩野派、土佐派、琳派、文人画など流派
 を超えてあらゆるジャンルの絵を描いた文晁の画風の特
 徴を述べた表現です。通常、狩野派であれば狩野派の画
 風、宮廷絵師の土佐派であればやまと絵風、池大雅であ
 れば文人画風と流派の中で絵を描くのが普通ですが、文
 晁はあらゆるジャンルの画風をマスターして描くことが
 できた画家であるため「この絵師、何者」と言う表現も
 できる画家なのです。藤田記念博物館では、春の結城素
 明の企画展に続き第二弾の企画展として没後180年を迎
 えた谷文晁の企画展を開催中ですが、開始して今日で7
 日目ですが、すでに入館者は300名を超えています。芳
 名簿をみますと、福島、郡山、伊達、浪江、いわき、会
 津、田島など全県からくまなくおいでいただいています。
 ということで、福島県では文晁人気は高いものがありま
 す。それはなぜかという文晁が松平定信の家臣だった
 からだと思います。定信が参勤交代で白河に帰るときに
 文晁も連れて来たということがあって、半年くらいずつ
 文晁は白河に滞在して絵を描いていました。小峰城三の

丸にあった定信の下屋敷に三郭四園という庭園がありま
 した。宝酒造跡の付近ですが、その南側に文晁のアトリ
 エである「小峰山房」がありました。白河と文晁にはそ
 んな深い関係がありました。

では、文晁の絵はどのような流派なのか、江戸時代には
 どのような流派の絵画があったのか見ていきたいと思
 います。まず、狩野派、有名ですよ。狩野派は、室町
 将軍に仕えて襖などに絵を描く障壁画や屏風絵の制作な
 んかにかかわっていました。江戸時代になってからも徳
 川将軍家に仕えています。これは名古屋城の障壁画で狩
 野探幽が描いたものです。信長、秀吉や家康の時代は日
 本における城と城下町の建設ラッシュなんですよ。で
 すから、そういうところで狩野派の絵師が一団として城
 の障壁画制作に携わり、江戸幕府が滅亡するまで将軍に
 仕えていました。大名も将軍にならって狩野派の絵師を
 抱えて、大名自身の教養として狩野派の絵を習っていま
 す。

二つ目の集団として、土佐派という天皇に仕える宮廷
 絵師です。源氏物語にみられるような伝統的な大和絵を
 描く集団です。画面は江戸時代の土佐光起という絵師が
 描いた作品です。次に琳派と呼ばれる流派です。

画面は有名な俵屋宗達「風神雷神図」、それに尾形
 光琳の「紅白梅図屏風」です。今までにないような極め
 て装飾的でデザイン性の強い絵を描く流派です。

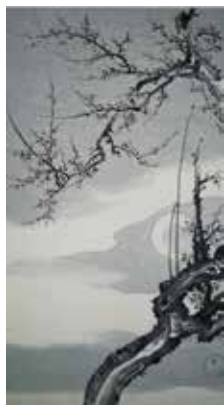
次は文人画。池大雅、与謝蕪村、そして谷文晁などが
 文人画と呼ばれる流派です。文人画は室町時代には中国
 から日本に入ってきていたのですが、江戸時代中期頃こ
 ろまでは隆盛をみませんでしたが、狩野派に飽きた人
 たちによって文人画というスタイルが見直され、流行す
 るようになっていきました。文人画の文人、これは日本
 でいえば国家公務員的な人たちのことです。科挙に合格
 した文人は、七弦琴とよばれる楽器を演奏したり、碁を
 うったり、あるいは漢詩文をつくったりしてさらに絵も
 描くという教養が求められていました。ちゃんとした専
 門の絵師はおりましたので、文人の人達はヘタウマ的に
 山水画を描いたりし、そこに自然を謳うような漢詩文を
 付けて、いわゆる心象風景を描いたのであります。とこ
 ろが、そういう文人画が日本にきてからは職業画家の人
 達が描くようになったのです。文人画は南画とも呼ばれ、
 関西の方から池大雅、与謝蕪村が流行させ、それが関東、
 江戸で関東南画を大成させたのが谷文晁なんです。文晁
 は画塾写山楼で全国に数百人の門弟を抱えていました。
 二と七の付く日に画塾を開き、数百人のお弟子さんが来
 て入りきれないほどであったというエピソードがありま
 す。また九州の田能村竹田という画家は通信教育を受け
 ていたようです。そういう意味では、狩野派が公立の芸
 術大学とすれば文晁は私立芸術大学の学長的な存在でし
 た。画面の一番右側の極彩色の山水画は静岡にある美術
 館が所蔵しているものです。文晁はこの文人画のジャン
 ルには一応入ってはいるのですが、「この人何者」と言
 われるように文人画をはじめ大和絵から琳派風の絵、そ



↑ 谷文晁筆「驟雨山水図」



↑ 蒲生羅漢筆
「琴碁書画図屏
風」(右隻部分)



← 谷文晁筆
「月に梅花図」

して狩野派風の絵までこなした画家でした。

次に円山四条派と呼ばれる流派です。有名な円山応挙とその一派が京都の四条通に住んでいたのもそのように呼ばれています。円山応挙も写生画を多く残した画家ですが、この画面のように金屏風や障壁画に中国の人物などを描いています。

次にその他というくりにしてしまいましたが、有名な伊藤若冲。藤田記念博物館にも若冲絵画が所蔵されています。それに浮世絵、葛飾北斎や歌川広重、そういったジャンルの流派がありました。

次に「松平定信と文晁」というテーマですが、何で定信と文晁が親しくしていたのかというと、文晁のお父さん・谷麓谷が定信の生家である徳川御三卿田安家の家臣であったということです。定信はもともと松平家の人ではなく、8代将軍吉宗の孫でした。吉宗は、それまでの徳川御三家、紀州徳川家、尾張徳川家それに水戸徳川家がだんだんと血筋が遠くなり、あらたに御三卿をつくりました。清水、田安、一橋家。その田安家に生まれたのが定信です。ですから、定信は小さいころから将軍になるための英才教育を受けた人間です。文晁のお父さんが田安家の家臣で、文晁もまた田安家家臣となり、定信が老中の時に定信付きの家臣になったのです。それからずっと生涯にわたり定信に仕えることになったのです。定信の江戸の屋敷は築地の市場があった場所です。そこには「浴恩園」という大名庭園があったと築地市場の正面玄関に大きな東京都の看板が設置されていました。定信が江戸にいる時はほぼそこに住んでおりました。文晁もそこで様々な絵画御用を務めることが多かった。定信に仕えた文晁がどんなことをしたか。画面のとおり定信が老中の頃、イギリス船やロシア船が日本近海に出没し、江戸が海に対しては無防備であったことから、海に対する海防、備えをしなければならない。ロシア船でもイギリス船でも容易に江戸湾に入ってくることができる状況だったのです。定信は江戸湾を囲む伊豆・相模方面に海岸巡視に文晁を伴って文晁に海岸線の風景を写生させました。それが「公余探勝図」です。後で絵を見てもありますが、これは現在重要文化財になっています。須賀川出身の亜欧堂田善という画家を定信は召し抱えています。田善には世界地図をつくらせたのです。文晁には海岸風景を描かせ、田善には地図をつくらせていたのです。それと「集古十種」の編纂を行い、全国の文化財調査も行っています。

では、画面を見てください。これが「公余探勝図」です。上野の東京国立博物館に所蔵されています。入り組んだ海岸線の地形がこうなっていると海防の基礎資料としたのです。当時の絵師は普通目の前の風景はあまり描かない。だいたい見たこともない中国の山水風景を描いたり、中国の人物画を描いたりすることが芸術家である絵師の仕事で、目の前にある風景を描くことには抵抗があったようです。そんな概念がありましたから、定信の政策的な考えがあって、このように洋画の影響を受けた

風景画を描いたのです。

また、定信が幕府老中に就任して最初の仕事は炎上した京都の御所、天皇のお住まいが火災により焼失し、これを古式にのっとり再建する命があり、京都に赴きました。再建のために古い文献を調査しますが、文献では建築物の構造は結果として分からず、一番ヒントになったのが、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代の古い絵巻物でした。源氏物語の吹き抜け屋台の建物など、古絵巻に描かれる建造物の姿が非常に参考になったそうです。今でいうところの画像学です。そんなことで古い絵巻を文晁など白河藩周辺の絵師に模写させています。その模写も普通の模写じゃない。建物であれば建物だけ抜き書きする、あるいは衣装であれば絵巻から衣装だけ抜き書きする、家具調度品であればそれだけを抜き書きする。そうすることにより鎌倉時代など時代ごとにどのような建物や衣装、調度が使用されていたかを知ることができる。そうした画像学をフル活用した定信が編纂した、この画面の写真のような絵巻の模写「古画類聚」という巻物が現在東京国立博物館に残されているのです。そのような事業を実際にやった絵師が文晁なのです。今小峰城に三重櫓や前御門が木造で復元されていますが、定信のそのような体験があって定信の時代に小峰城内の櫓や門の実測図が作られ、その実測図を描いた巻物が残されていて、木造復元することができたのも定信のお蔭なのですね。

もうひとつ定信の行った大きな事業は「集古十種」全85巻という全国の文化財を調査の上に出版した文化財図録の編纂事業です。北は青森から南は九州までの文化財、古いものをですね、ただの古いものではなく文化財、歴史研究の資料ととらえて調査して本を出版しています。今だったら写真で撮りますが、当時はカメラがないので文晁は白河藩周辺の絵師を養成してそのような文化財調査事業をすすめたのです。古美術を勉強する人は現在でも定信編纂の「集古十種」を参考にしています。白河の定信と文晁がタッグを組んでそのような事業に取り組んでいます。

次のテーマとして文晁の画風変遷を4期に分けて説明する予定でしたが、持ち時間の関係で割愛して、寛政年間に2度白河に半年ずつ滞在していたというテーマにうつります。

寛政6年7年の白河滞在。定信は寛政5年7月に幕府老中を退任し、翌年に白河帰藩を許されて32歳の文晁を伴って白河に帰ってきます。そして翌7年の春まで白河に滞在しています。この間、文晁は松平定信の宮城県塩釜明神への代参で、白河藩士鶴飼貴重とともに旅立ち松島などを遊覧しています。県立美術館で開催されたミネアポリス美術館展で文晁が松島を描いた作品が展示されていましたが、この時の経験をもとに描かれた作品です。その松島紀行から白河に戻った文晁は、小峰城内三の丸の三郭四圍の南側官舎をアトリエにして多くの作品を描いております。その作品がいわゆる「小峰山房描き」といわれるものです。戦前は確認されているのです。

が、戦後はあまり作品が残されていないのですが、戦前の本で作品が確認されています。水戸藩の木村謙次という人が当時の白河での文晁の行動を紀行文に書いていますが、多くの人達が文晁に絵を描いてくれと依頼があり、これを受けていたようです。画面の横長の山水図を見てください。斧で割ったような鋭角的な山が描かれています。手前には陰影のある松の木が描かれています。今回の展覧会では、これと似たこの時代の作品も展示しています。画面の一番左側の雪景色の山水図ですが、文晁の滞在中に雪の季節もありましたので、白河での雪景色をヒントにこのような山水画も描いております。

その後の寛政10年11年の白河滞在中。当時「集古十種」の編纂事業が進行中で、その打ち合わせもあって白河に長期滞在しています。文晁ばかりではなく、市役所の向かいにある常宣寺の住職の白雲和尚、羅漢山人なども事業に携わっています。この寛政10年・11年の滞在中に画面にあるちょっと糸をひいたような印章・判子がありますが、これを文晁は小峰城内から発掘しています。非常に気に入った判子ようで、以後の作品に頻繁にこの判子を使用しています。江戸幕府の祐筆である屋代弘賢がこの経緯を日記に記しています。この印章は室町將軍義満の頃、中国の明と日明貿易で使用された勘合符の判子ではないかとされているものです。文晁の晁の字に似ていて気に入って使用したようです。画面の右側に風雨の山水画がありますが、これも白河滞在時に描かれた作品です。現在の企画展に展示している藤田記念博物館の館蔵品です。文晁が白河で描いた作品はあまり白河には無く、市の歴史民俗資料館に1点、それに藤田記念博物館に1点。ですから博物館にあるのが2点目の発見ということになります。

このほか文化4年1807年、45歳の時に白河藩士の大野文泉という絵師と奥州旅行をしています。これも定信の命を受けた奥州一円の文化財調査の旅ですが、その旅立ち前に白河に3泊しています。画面の夜空の月に照らし出された白梅の作品はかなり大きな作品で、企画展に展示中ですが、このサインの書風と判子からみると、ひょっとしてこの時に描いたものかもと個人的には考えています。

まとめとしまして、文晁の作品はいわゆる寛政文晁がコレクターの間では人気がある作品です。細かくてみずみずしい画風。寛政年間に白河に2度も来て、白河で多くの作品を描いている。そして文化年間も含めて3回ほど白河に滞在している。これはあくまで記録から分かっていることで、このほかに記録にない白河滞在中もあったかもしれない。そういった意味において、江戸絵画の巨匠である谷文晁、しかも人気の高い寛政文晁、白河の松平定信との関係で深いゆかりがある。白河藩周辺の多くの絵師を養成している。お寺に残っている仏画を除けば、一般的な江戸絵画は文晁以前の絵画が白河地方には無い、ということは白河の江戸絵画史は文晁からはじまるということが言える。そのようなことから今回藤田記念博物

館で開催している企画展は、白河における江戸絵画のはじまりを見ることができる展覧会であるといえます。定信の松平家は三重県の桑名に国替えになりましたが、唯一町絵師であった羅漢山人、白河羅漢山の裾野に住んでいた蒲生羅漢が残り、文晁の画風を受け継いで、羅漢から幕末の絵師馬弓碧湛、小河原稜山、佐竹永邨などに引き継がれていった。そして、そのあとの関根正二の時代になっていくと。そういう意味においては文晁が白河に与えたインパクトは絵画史的には大きい。そしてそれには松平定信が大きく関与していたと。

ということで、半端な話になってしまいましたが、なんとなく文晁と白河の関係が分かって頂ければありがたいと思います。ありがとうございました。

○質問コーナー

鈴木孝幸会長

先程はありがとうございました。一つだけ、ちょっと質問させていただきます。文晁と弟子が沢山いて、私は歴史詳しくないんですけども、描いた絵に弟子が勝手にこの判子を押して売りさばいたというみたいな、容認してたと聞いているんですね。それで物凄い偽物が多いということで、これは見分け方何かあるんでしょうか。

○佐川庄司様

鈴木会長仰るとおり、私らの業界では文晁の作品は8割偽物だと。大体、そんな感じです。私が見る時は文晁のデータベースがありまして、20代から78歳で亡くなるまでのサイン、落款って言うんですか。それがどのように変化してきたかというデータがあります。それと使ってた印章、それもずっとデータベースにある。あと時代によって、さっき省略しましたが画風変遷が30代に描く絵と50代に描く絵では全然画風が変わるんですよ。ですから、サイン、判子、画風、この三点が合致していれば大体オーケーということなんです。文晁は豪放磊落な人で一向構わずお弟子さんにこう書けとか細かい指導しないんです。模倣を勝手に自分で写せと、好きなやつ写せと。好きなやつ写したら自分流にマスターして好きなように表現しろと。そういう画材だけは自分が準備するからということで、細かくないんですね。おらかな教え方をしてたので、そのぶん判子も自分の判子も使っていていいよみたいな感じでいつでも使える。そんなことがあって文晁見る時はなかなか難しい面があって、一般的には8割が駄目だというふうに、残りの2割ぐらいしか本物がないと言われてます。そのぐらい人気作家だったということですね。

